



電極パッドは左側の小指側の皮膚に貼り付ける。電圧の刺激が自分の指を握る痛みと同じくらいの強さと感じた時点で反対の手で持っているスイッチを押す

受診する。頭痛、腰痛、肩の痛み、膝の痛み、月経痛、帯状疱疹、事故の後遺症……訴えは実にさまざま。受診者の多くは他診療科の医師からの紹介だ。だとしたら、それぞれの診療科で痛みの治療まですればいいではないか。我々はいそいそと考えてしまいが、ここに大きな誤解があると、大瀬戸医師は指摘する。

「もちろん、病気やケガをすればその部分に炎症が起きますから、痛みが出ます。しかし、なかには病気やケガが治っても痛みだけが残るケースや、手術が必要でない医師が判断するようない病状でも、痛みだけが強く現れたりするケースがあるのです」

ケガや病気と痛みとは必ずしも相関するものではなく、別に考えたほうがいいこともある。内科や整形外科、婦人科などの診療科では「臓器や病気を診て、治す」のに対し、ペインクリニックは「痛みそのものに焦点を当てて、その原因を探り、治療を行っていく。だからこそ、ペインクリニックの存在が不可欠なのである」。

こんな例がある。ある60代の男性は、背骨に圧迫骨折を起こし、整形外科を受診した。骨にわずかなひびが入っていたが、結局有効な治療法がなく、鎮痛薬とコルセットの装着のみ。しかし、薬でも治まらない痛みに耐えきれず駆け込んだ先が、大瀬戸医師のいるペインクリニックだった。「この患者さんにはすでに処方されていたものと別の種類の鎮痛薬をお渡しし、それと同時に神経ブロックという痛み治療を実施した

ことで、かなり痛みが和らぎました」(大瀬戸医師)

検査で痛みの強さを客観的に評価する

患者の多くが抱くのは「この痛みを周りの人は分かってくれない」という憤りではないだろうか。事実、痛みは体温や血圧などと違い、簡単に数値で測ることができない。そこが痛み治療の難しいところだ。

こうした主観的な症状を客観的に評価できないかと、これまでさまざまな試みが行われてきた。有名なものは、VAS(ビジュアル・アナログ・スケール)だ。0から100ミリのスケールを用意し、0が「痛みなし」、100が「想像しうる最も強い痛み」として、自分の痛みがどこに当てはまるかを自ら記す。

一方、大瀬戸医師らが実施するのは、「ペインビジョン」という評価法だ。これは患者の腕に電極パッドをつけて微弱な電気を流し、自分の痛みと同程度の刺激と感ずるまで電圧を高めてその数値を測定、スケール化するという検査法

だ。キリキリする、ズキズキする、というような痛みの「質」は測れないが、強さを客観的に評価することはある程度、可能だ。

ちなみに、健康な人が痛みの限界と感じる値は100以下。慢性痛があると400~500まで値が上がる患者さんも多数いる。とくに痛みが強い三叉神経痛になると、1000を超すこともあるそうだ。

大瀬戸医師らは、ペインビジョンで表れた値に、心理検査や問診票(生活の質の低下の程度をみるなど)の結果を照らし合わせ、患者の要望を聞いたうえで、治療方針を決めていく。「ペインビジョンによって、痛みがどの程度軽くなったのか、治療の経過を追うことができます。患者さん自身も痛みを客観的に把握できるので、治療に対して積極的になってくれます」(大瀬戸医師)

治療には、痛みの伝導をブロックする鎮痛薬や、強

いしびれで生じる痛みに効く薬などで症状を改善させる。痛みの神経を直接治療する神経ブロック療法やトリガーポイント注射などをこれらに組み合わせることも多い。三叉神経痛では、手術をすることもある。

慢性痛の場合、薬を長期にわたって飲む可能性があるので、そのため、効果だけでなく副作用も考慮し、安全に、かつ治療効果が十分に得られるよう用量を細かく調整する。そこが痛み治療を専門に行うペインクリニックの強みでもある。

整形外科などで長期にわたり痛みが改善しない患者は、一度、ペインクリニックの受診を考えたほうがいいだろう。医師も万端ではない。患者にも積極的に治療に関わる努力が必要である。

慢性痛の場合、薬を長期にわたって飲む可能性があるので、そのため、効果だけでなく副作用も考慮し、安全に、かつ治療効果が十分に得られるよう用量を細かく調整する。そこが痛み治療を専門に行うペインクリニックの強みでもある。

整形外科などで長期にわたり痛みが改善しない患者は、一度、ペインクリニックの受診を考えたほうがいいだろう。医師も万端ではない。患者にも積極的に治療に関わる努力が必要である。



「痛みの感覚は千差万別。それだけではない治療が必要」と話す大瀬戸医師

「痛みが続いてつらい、痛みのせいで生活に不自由している。そういう人たちがらでできるだけ痛みをなくし、苦しめない生活を送ってもらおうが、ペインクリニックの役目です」と話す。このペインクリニックでは老若男女問わず、毎日70人ほどの患者が



「ペインビジョン」の測定の様子。電圧の数値は真の痛みと手ざれる。人にわかってもらいたい痛みも、この装置を使うことで客観的な評価が可能になる

伊藤隼也が行く! ニッポンの医療現場 第40回

頭痛、腰痛、関節の痛み…… 痛みに向き合い治療する 「ペインクリニック」とは?

ほとんどの人が経験したことのあるケガや病気による「痛み」。慢性化すると生活の質の低下にもつながる。このつらい「痛み」に徹底的に向き合い、苦痛の解決を手助けするプロフェッショナルがいる。現代人の痛みと対決するペインクリニックを取材した。

病気やケガではなく、痛みが焦点を当てる

ケガや病気などで体の組織が傷ついたときに生じるのが「痛み」。私たち人間に備わった防衛本能の一つだが、長引けば生活の質の低下を招くうえ、精神的にもダメージを受ける。

実際、慢性痛で苦しむ人は少なくない。ある企業の調査では、国民の約1割が何らかの慢性痛を経験していることが明らかになった。こうしたなかなか治らない痛みに向き合い、多様な手段で痛み治療を行うのがペインクリニックだ。麻酔科医としてのべ10万人以上の患者に痛み治療を行ってきた大瀬戸清茂医師(東京医科大学麻酔科学臨床教授)は、

「痛みが続いてつらい、痛みのせいで生活に不自由している。そういう人たちがらでできるだけ痛みをなくし、苦しめない生活を送ってもらおうが、ペインクリニックの役目です」と話す。このペインクリニックでは老若男女問わず、毎日70人ほどの患者が

いとう・隼也や医療ジャーナリスト・写真家 国内外問わずさまざまな医療現場を積極的に取材し、患者中心の医療実現のための活動中。テレビ・雑誌・書籍など、多数のメディアでより良い医療のあり方を追求・発信し続けている。http://itokunya-tv.jp Twitter=@itokunya